

地域を学ぶことの意義に関する一考察

—大津についての学びに関する調査結果を基にして—

神部純一
(滋賀大学)

【要旨】

多くの人が何らかの役割を持ちながら主体的に地域づくりに参画していくためには、まず、住民一人ひとりの心の中に、自分の住む地域に対しての愛着と誇りを育てることが大切である。本研究では、調査結果を基に、地域について学ぶことが、地域への「愛着」や「地域づくり」に関する活動にどう関わっているのかを分析した。

その結果、①地域について学ぶことは、人を地域づくりに関する活動へと結びつける。②地域について学ぶことは、特に居住年数が浅い人の、地域に対する愛着や関心を高める。③地域に対する愛着の深まりは、地域づくりに関する活動ニーズを高める効果がある。④学びを通じた交流の豊かさが、人を地域づくりに関する活動へと結びつける重要な要因となっていることを明らかにした。

1. 研究の目的

都市化や核家族化の進行とともに、地域の人間関係の希薄化等、地域社会の衰退が指摘されてきたが、近年、特に東日本大震災以降、「絆づくり」や「地域づくり」への関心が人々の間で高まってきている。

地域づくりは本来、そこに住むすべての人が何らかの役割を持ちながら地域づくりに参画し、互いに学びあい、コミュニケーションを深める中で活性化していくものである¹⁾。しかしその取り組みは、一部の熱心な住民によってなされ、せっかく盛り上がった活動も彼らに続く住民が出てこないがために、いつの間にか衰退していった、という事例も少なくなかった。

筆者は、多くの住民が参画しつつ、継続した地域づくりを進めていくためにはまず、住民一人ひとりの心の中に、自分の住む地域に対しての愛着と誇りを育てることが大切だと考えている。なぜなら、地域に愛着も誇りもない人から、地域づくりへの主体的な活動は生まれないからである。

最近各地で、地域について学ぶ機会としての「地域学」が立ち上げられている。住民一人ひとりがこうした学びを通じて、地域の良さを発見し、そして再評価していくことが、彼らの地域への愛着を深め、ひいては地域づくりの担い手として行動する人づくりにつながるのではなかろうか。

本研究は、大津市民を対象に実施した調査結果を基に、地域について学ぶことが、市民の地域への「愛着」や「地域づくり」に関する活動にどう関わっているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

(1) 調査の実施

大津市民の地域に対する思いや地域についての学びの実態等を把握するために、滋賀大学社会連携研究センターと大津市との共同で、「大津市民の” おおつ” についての学びに関する調査」を実施した。

(2) 調査の方法

調査の方法は、以下の通りである。

- 1) 対象 : 20 歳以上の大津市民
- 2) 標本数 : 2000 名
- 3) 抽出方法 : 無作為抽出
- 4) 調査方法 : 郵送法
- 5) 調査期間 : 平成 24 年 9 月 28 日～10 月 20 日
- 6) 回収結果 : 703 (回収率 35.2%)

(3) 調査の内容

調査内容は、基本属性ならびに①居住地への愛着度、②大津についての学習の実施状況、③学びを通しての交流の実態、④地域での活動状況等についてである。

(4) 回答者の属性

回答者の基本属性は以下の通りである。

性別は、「女性」が 56.9%、「男性」が 43.1%であった。年代は、「成人前期 (20～30 代)」が 17.2%、「成人中期 (40～50 代)」が 33.3%、「成人後期 (60 代以上)」が 49.5%であった。また、居住年数は「5 年未満」が 11.8%、「5～15 年未満」が 14.1%、「15 年以上」が 74.1%であった。

3. 研究の結果

(1) 地域についての学習経験

図 1 は、過去 3 年間の大津についての学習経験を示したものである。

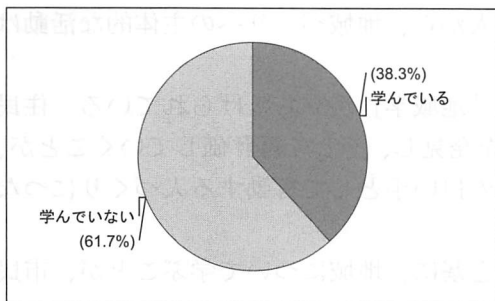


図 1 学習経験 (N=703)

「あなたはこの3年の間に、大津について何か学んでいますか」という問いに対して、38.3%の人が「学んでいる」と回答していた。

図2は、その学習内容をみたものである。

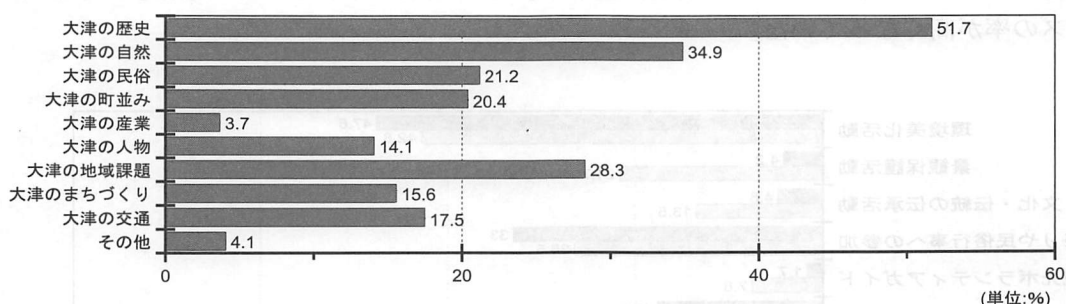


図2 地域についての学習内容 (N=269 M.T.=211.5%)

その結果、「大津の歴史」を学んでいる人の率が51.7%でもっとも高く、次いで「大津の自然(34.9%)」、「大津の地域課題(28.3%)」の順となっていた。

2) 地域づくりに関する活動の実態とニーズ

図3・4は、過去3年間に行った地域づくりに関する活動の実態とニーズを示したものである。

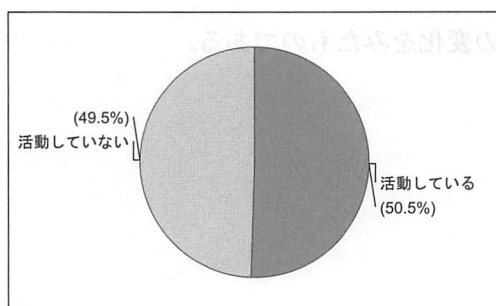


図3 地域づくりに関する活動経験の有無 (N=703)

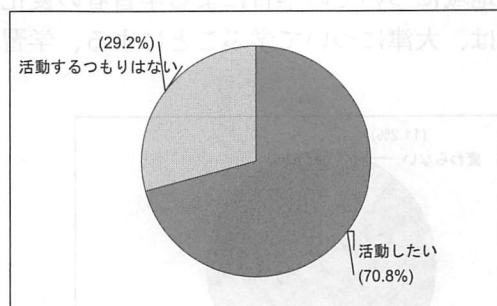


図4 地域づくりに関する活動ニーズ (N=703)

まず、「あなたはこの3年の間に、次のような活動をしていますか(選択肢は図5を参照)」という問いに対しては、50.5%の人が1つ以上の活動に○をつけていた。一方、「あなたは、次のような活動をしたいと思いますか(選択肢は図5を参照)」という問いに対しては、70.8%の人が1つ以上の活動に○をつけていた。

図5は、その活動内容をみたものである。

まず、実際に活動している人の活動内容をみってみる。その結果、「環境美化活動」をしている人の率が47.6%でもっとも高く、次いで「祭りや民俗行事への参加(33.0%)」、「地域でのまちづくり活動(17.7%)」の順となっていた。一方、活動ニーズをみると、もっとも

も率が高かったのは、実態と同様に「環境美化活動（42.8%）」であったが、次いで「地域でのまちづくり活動（34.1%）」、「祭りや民俗行事への参加（26.5%）」の順となっていた。

実態とニーズを比較すると、「景観保護活動」と「地域でのまちづくり活動」で、活動ニーズの率が高くなっていた。

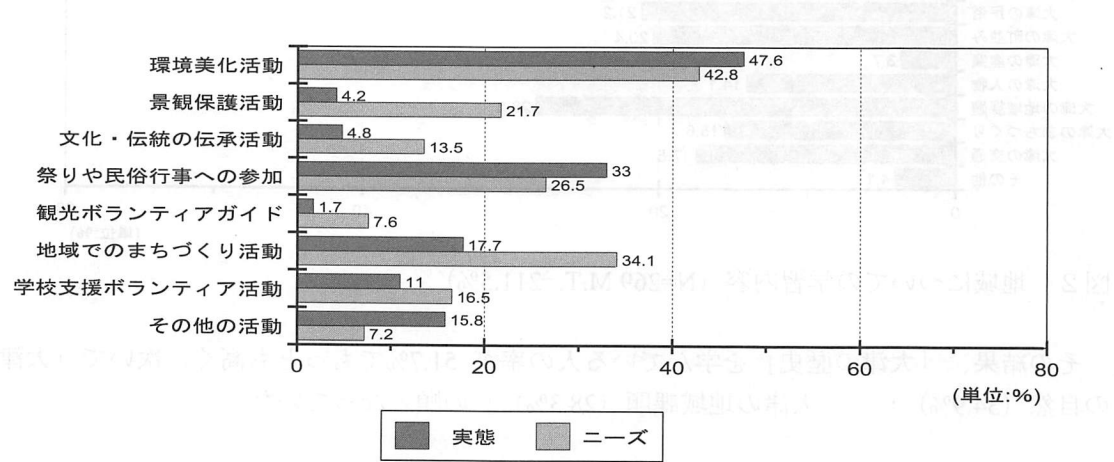


図5 活動実態とニーズ別にみた活動内容
（【実態】N=355 M.T.=135.8% 【ニーズ】N=498 M.T.=169.9%）

（2）地域についての学習による学習者の変化

図6は、大津について学ぶことによる、学習者の変化をみたものである。

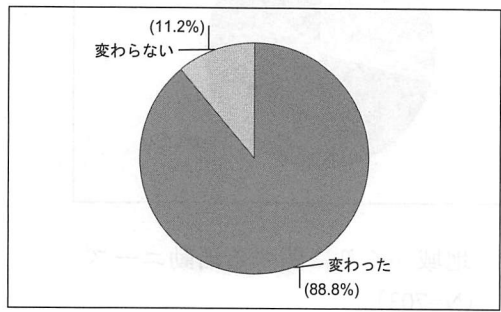


図6 変化の有無（N=269）

「あなたが、大津について学ぶことで何か変化はありましたか」という問いに対して、88.8%の人が「変わった」と回答していた。

その変化の内容をみたのが、図7である。

変化としては「大津についてもっと知りたいと思うようになった（42.7%）」に次いで、「大津への愛着が深まった（41.0%）」と回答した人の率が高くなっていた。

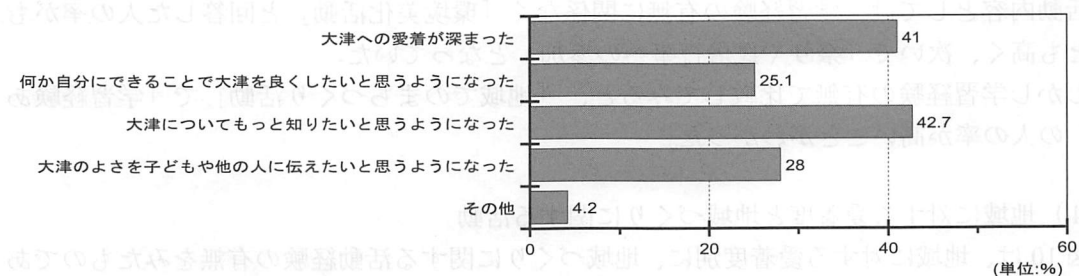


図7 変化の内容 (N=239 M.T.=141.0%)

(3) 地域についての学習経験と地域づくりに関する活動

図8は、地域についての学習経験別に、過去3年間の地域づくりに関する活動経験の有無を示したものである。

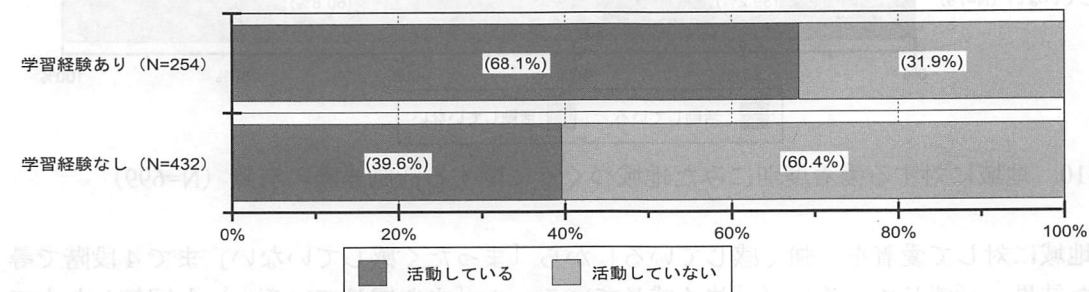


図8 地域についての学習経験別にみた地域づくりに関する活動経験の有無 (N=686)

その結果、「学習経験あり」の人の68.1%が「活動している」と回答していたのに対して、「学習経験なし」の人では39.6%にとどまっていた。

図9は、その活動内容をみたものである。

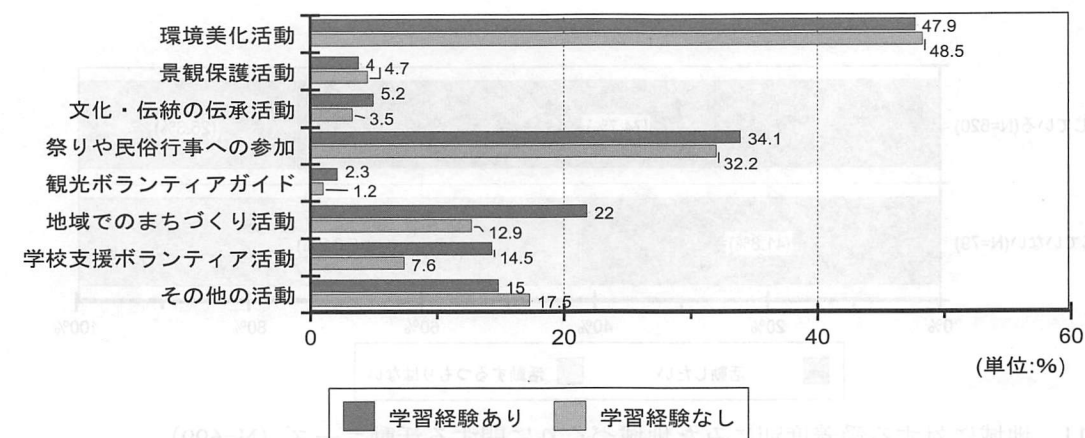


図9 地域についての学習経験別にみた活動の内容

(【学習経験あり】N=173 M.T.=145.1% 【学習経験なし】N=171 M.T.=128.1%)

活動内容としては、学習経験の有無に関係なく「環境美化活動」と回答した人の率も
っとも高く、次いで「祭りや民俗行事への参加」となっていた。

しかし学習経験の有無で比較してみると、「地域でのまちづくり活動」で「学習経験あ
り」の人の率が高いことがわかった。

(4) 地域に対する愛着度と地域づくりに関する活動

図 10 は、地域に対する愛着度別に、地域づくりに関する活動経験の有無をみたものであ
る。

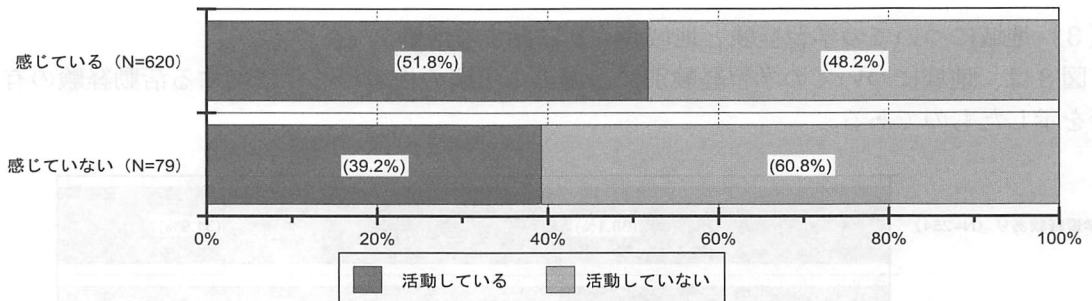


図 10 地域に対する愛着度別にみた地域づくりに関する活動経験の有無 (N=699)

地域に対して愛着を「強く感じている」から「まったく感じていない」まで4段階で尋
ねた結果、「感じている」（「強く感じている」＋「まあ感じている」）と回答した人
では、「活動している」と回答した人の率が 51.8%であったのに対して、「感じていない」
（「あまり感じていない」＋「まったく感じていない」）と回答した人では、「活動して
いる」と回答した人の率が 39.2%であり、地域に対して愛着を「感じている」人の活動経
験率が高いことが明らかとなった。

また、地域に対する愛着度別に、地域づくりに関する活動ニーズをみたのが、図 11 であ
る。

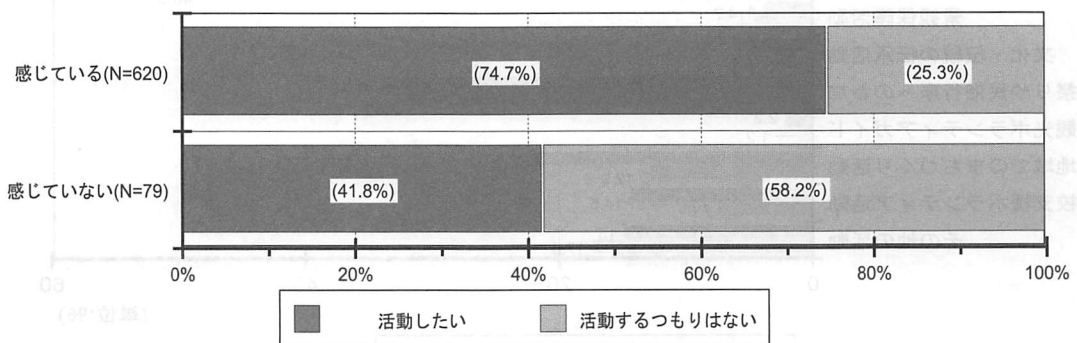


図 11 地域に対する愛着度別にみた地域づくりに関する活動ニーズ (N=699)

愛着を「感じている」と回答した人では、「活動したい」と回答した人の率が 74.7%で
あったのに対して、愛着を「感じていない」と回答した人では 41.8%であり、愛着を「感

じている」人と「感じていない」人との間には大きな差がみられた。

図 12 は、活動したい内容をみたものである。

愛着を「感じている」と回答した人では、「環境美化活動」と回答した人の率が 43.8%でもっとも高く、次いで「地域でのまちづくり活動（35.2%）」となっていた。一方、愛着を「感じていない」と回答した人でも、もっとも率が高かったのは、愛着を「感じている」と同様に「環境美化活動（30.3%）」であったが、次いで「祭りや民俗行事への参加（27.3%）」となっていた。

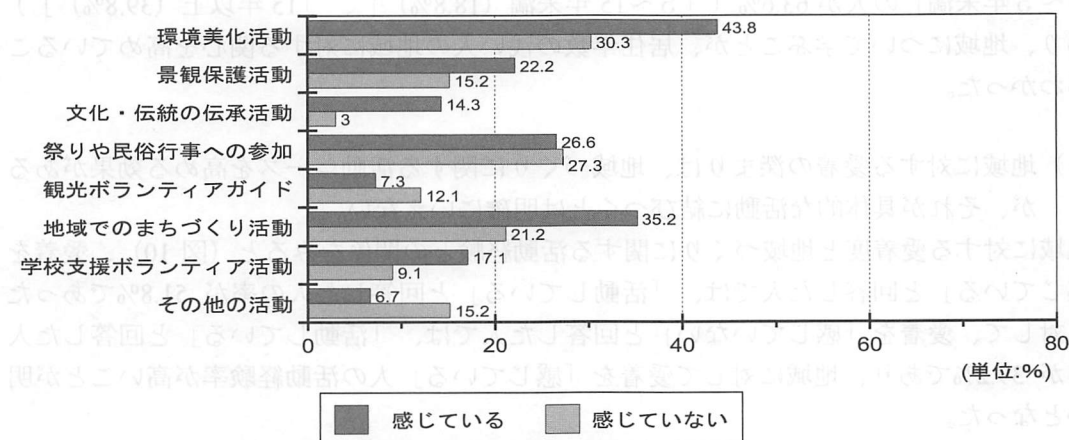


図 12 地域に対する愛着度別にみた地域づくりに関する活動ニーズの内容

（【感じている】N=321 M.T.=140.2% 【感じていない】N=31 M.T.=106.5%）

愛着を「感じている」人と「感じていない」人を比較すると、「環境美化活動」と「地域でのまちづくり活動」で、「感じている」と回答した人の率が高くなっていた。

4. 考察と今後の課題

（1）考察

以上の結果から、以下のことが明らかとなった。

1) 地域について学ぶことは、人々を地域づくりに関する活動へと結びつける。

学習経験別に、過去3年間に行った地域づくりに関する活動の実態をみると（図8）、「学習経験あり」の人の68.1%が、地域に関する「活動している」と回答していたのに対して、「学習経験なし」の人では39.6%にとどまっていた。また、活動内容をみると（図9）、「地域でのまちづくり活動」では、「学習経験あり」の人の率が「学習経験なし」の人の率を大きく上回っていた。

2) 地域について学ぶことは、特に居住年数の浅い人の地域に対する愛着や関心を高める

地域について学ぶことによる変化としては、「大津についてもっと知りたいと思うようになった（42.7%）」と「大津への愛着が深まった（41.0%）」と回答した人の率が、他の項目と比較して高くなっていた（図7）。

これを属性別にみると、居住年数別の分析で差が認められた。まず、学びを通して「大津への愛着が深まった」と回答した人の率は、居住年数が「3～5年未満（54.3%）」の人（「3年未満（38.9%）」、「5～15年未満（31.3%）」、「15年以上（36.7%）」）で高くなっていた。住み始めたばかりの人が地域について学んだとしても、すぐに愛着が湧くわけではないが、ある程度住み慣れてきた比較的居住年数が浅い人にとっては、学ぶことが地域に対しての愛着を深めるいいきっかけになっているといえる。また、「大津についてもっと知りたいと思うようになった」と回答した人の率は、「3年未満」の人が61.1%、「3～5年未満」の人が63.6%（「5～15年未満（18.8%）」、「15年以上（39.8%）」）であり、地域について学ぶことが、居住年数の浅い人の地域に対する関心を高めていることがわかった。

3）地域に対する愛着の深まりは、地域づくりに関する活動ニーズを高める効果があるが、それが具体的な活動に結びつくとは明確にいけない。

地域に対する愛着度と地域づくりに関する活動経験との関係を見ると（図10）、愛着を「感じている」と回答した人では、「活動している」と回答した人の率が51.8%であったのに対して、愛着を「感じていない」と回答した人では、「活動している」と回答した人の率が39.2%であり、地域に対して愛着を「感じている」人の活動経験率が高いことが明らかとなった。

しかし、確かに愛着を「感じている」人と「感じていない」人との間に有意な差は認められるものの、愛着を「感じている」人の中で、地域づくりに関する活動経験がある人は半数を少し超えた程度である。逆に言えば、約半数は活動をしていないことになる。そこで、地域に対する愛着についての考えと地域づくりに関する活動ニーズとの関係を見ると（図11）、愛着を「感じている」と回答した人では、「活動したい」と回答した人の率が74.7%であったのに対して、愛着を「感じていない」と回答した人では41.8%となっていた。愛着を「感じている」人と「感じていない」人との間には大きな差が認められ、愛着を「感じている」人の、ほぼ4人に3人が「活動したい」と考えていることが明らかとなった。

以上の結果から、地域に対する愛着を深めることで、人々の地域づくりに関する活動ニーズを高めることはできるが、それが多くの人にとってすぐに具体的な活動に結びつくわけではなさそうである。

では、地域への愛着を深め、高まった地域づくりに関する活動ニーズをどうしたら、実際の地域づくりに関する行動へと結びつけることができるのだろうか。以下では、そのためのキーワードとして、「ソーシャル・キャピタル」を取り上げてみたい。

ソーシャル・キャピタルとは、「人々が他人に対して抱く『信頼』、それに『情けは人の為ならず』『お互い様』『持ちつ持たれつ』といった言葉に象徴される『互酬性の規範』、人や組織間の『ネットワーク（絆）』²⁾」である。内閣府は、2002年度にソーシャル・キャピタルに関する調査を行っている。調査結果をみると、ソーシャル・キャピタルの要素である「つきあい・交流」や相互の「信頼」関係といった項目で、その程度が高い人がボランティア・NPO・市民活動を行っている率も高くなっていた。また、ボランティア・NPO・市民活動によって「得た」ものとしては、「地域の様々な人とのつながりができた」と回答した人の率ももっとも高くなっており、これらの結果から、報告書では「ソーシャル

・キャピタルの培養とボランティア活動を始めとする市民活動の活性化は、互いに他を高めていくような関係、すなわち、『ポジティブ・フィードバック』な関係性がある可能性³⁾」を指摘している。ソーシャル・キャピタルと市民活動の間には、人と人とのつながりが人々を市民活動へと導き、また市民活動によって、そのつながりはさらに強まるという相乗的な関係があるということである。

もしそうならば、今回の調査ではどうなのだろうか。調査では、「学習を通しての地域の人との交流の広がり」について尋ねているので、その項目を使って検証してみる。

図 13 は、「地域の人たちとの交流の広がり」についての市民の考えを示したものである。「これまで知らなかった、自分の住む地域の人たちとの交流が広がった」という問いに対して、12.8%の人が広がったと「大いに思う」と回答し、「まあ思う（43.8%）」を合わせると、56.6%の人が、交流が広がったと「思う」と回答していた。

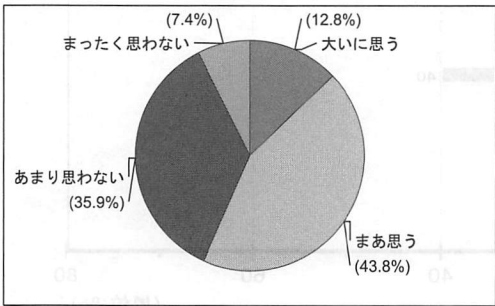


図 13 地域の人との交流に対する評価（N=242）

では、地域に対して愛着を感じている人のうち、学習を通じて地域の人との交流が広がったと「思う」人と「思わない」人では、地域づくりに関する活動率にどのような違いが見られるのだろうか。

その結果を示したのが図 14 である。

「交流が広がった」と「思う」（「大いに思う」＋「まあ思う」）と回答した人では、「活動している」と回答した人の率が 78.1%であったのに対して、「思わない」（「あまり思わない」＋「まったく思わない」）と回答した人では、「活動している」と回答した人の率が 55.1%であり、交流の広がりを感じている人の活動経験率が高いことがわかった。

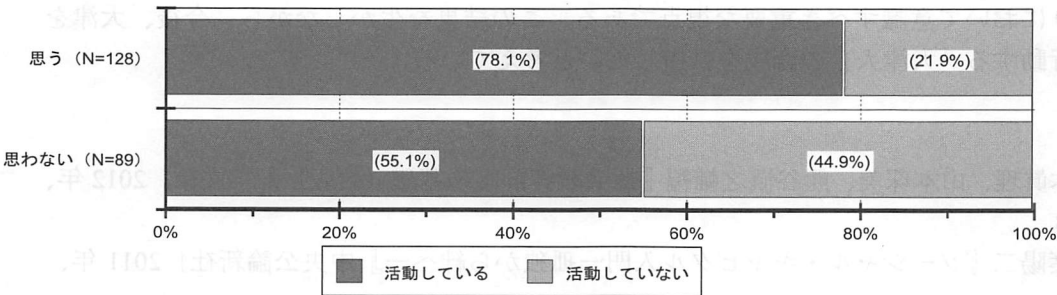


図 14 地域に対して愛着を感じている人の、地域の人との交流に対する評価別にみた地域づくりに関する活動経験の有無（N=217）

図 15 は、活動の内容をみたものである。その結果、交流が広がったと「思う」と回答した人も「思わない」と回答した人も、「環境美化活動」と回答した人の率をもっとも高く、次いで「祭りや民俗行事への参加」となっていた。

しかし両者を比較してみると、交流が広がったとは「思わない」と回答した人では、活動内容が「環境美化活動」に集中していたのに対して、「思う」と回答した人では「環境美化活動」の他に、「祭りや民俗行事」や「地域でのまちづくり活動」にも積極的に関わっていることがわかる。特に、「地域でのまちづくり活動」では、交流が広がったと「思う」人と「思わない」人の間に約 20 ポイントの開きがあり、地域の人との交流の広がりがかような活動へ参加する重要な要因になっていることがわかった。

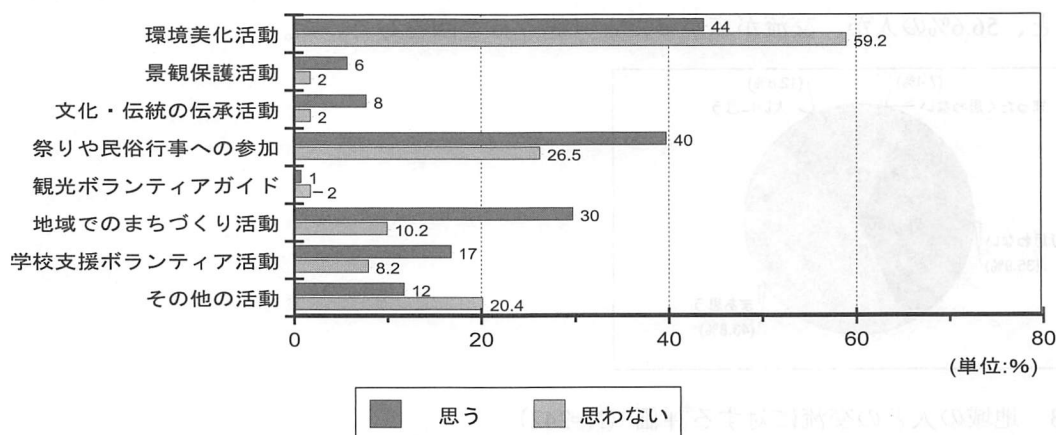


図 15 地域に対して愛着を感じている人の、地域の人との交流に対する評価別にみた地域づくりに関する活動内容

(【思う】N=100 M.T.=158.0% 【思わない】N=49 M.T.=130.6%)

(2) 今後の課題

現在、大津市では、地域を学ぶシステムづくりに取り組んでいる。今回の研究結果は、そのシステムを構築する上で、有用な情報を与えてくれるものであった。特に、人々を具体的な地域づくり行動へと向かわせるためには、地域に関わる知識を提供するだけではなく、互いに学びあう中での人間関係づくりを考える必要があることは、これからのシステムづくりにおいて意識すべき重要な視点である。この結果を生かしながら、今後、大津を愛し、行動する「大津人」の育成を目指したいと考えている。

(注)

- 1) 鈴木真理、山本珠美、熊谷慎之輔編『社会教育計画の基礎(新版)』学文社、2012年、p.28。
- 2) 稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門—孤独から絆へ—』中央公論新社 2011年、p.1。
- 3) 内閣府『ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』2002年、p.56。